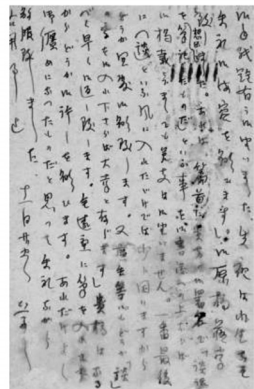
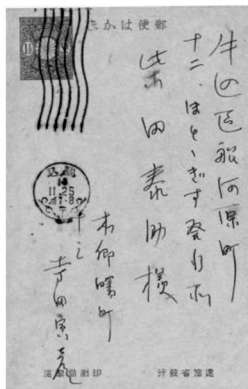


寺田寅彦の柴田宵曲宛てハガキ（全集未収録）

四宮義正

このたび寺田寅彦が柴田泰助（宵曲）に宛てたハガキを見る機会を得た。全集で調べてみると柴田宛ての書簡は無かったので紹介する。本文は水濡れがあってやや文字が流れている箇所があるが判読可能レベルである。



（表面） 牛込区船河原町十二 ほと、ぎす発行所
柴田泰助様

本郷曙町十三 寺田寅彦

（裏面） 御手紙難有う御坐いました。先夜は小生古屋先礼御海容を願ひます。」御原稿落掌致しました。あれは篇首に貴方の御署名で「談話を想出して筆記したものだ」といふ事を御書添への上ならば御掲載被下ましても差支は御坐いません。一番最後に（談）といふ風に入れた

だけでは少し困りますからどうか宜敷御願致します。また広告等にもどうか「談」の字を御入れ下されば大幸と存じます。」貴稿はなるべく早く御返し致します。無遠慮に筆を入れますからどうか御許しを願ひます。あれだけよく御纏めになったものだと思つて失礼ながら敬服致しました。 右用事迄 十一月廿五日 草々

柴田泰助は柴田宵曲（明治30年～昭和41年）のことである。東京日本橋生まれの俳人、歌人、随筆家、書誌学者で大正7年、21歳のときにホトトギスの編集員になっている。

全集で関係する作品を探すと、16巻にハガキに書かれた「談話」が掲載されている。内容は最近の俳句に対する感想、といったもので初出は大正12年1月のホトトギスである。全集の後記によると、表題が「寺田寅彦氏座談」で冒頭に記者（柴田）による次の前書きが付されていたとのことである。

十一月二十二日夜、寺田博士を訪ふ。瓦斯暖爐^{ガスだんろ}を焚きたる室内に蠅^{めぐ}一つあり、座を繞りて飛ぶ。

辞して後、脳中の記憶を辿り、席上の雑談を綴りてこの一篇を成す。（宵曲生）

これによって前年（大正11年）11月22日に柴田が寅彦の自宅を訪れて談話を筆記したことが判った。よって、消印は一部が潰れているが、大正11年である。また、柴田が迅速に筆記を送り届け、寅彦が掲載の注意と同意を与え、柴田が応えて前書きを付した流れがよくわかる。

寅彦の日記は定評があるが、柴田が訪問した日は何も記載がない。ハガキを出した25日は「アインシュタイン特別講義開始」とあるだけである。

ちょうどアインシュタインが来日中のことであり、よくそんな時間がとれたものだと思う。

また〔大正〕7年11月1日夜書齋のガスストーヴの前にて、という前書きの和歌9首がある。大正7年4月に曙町の新居に引っ越しているが、寒がりの寅彦にとってストーヴの嬉しさが表れている。

ストーヴに文見て居れば妻も来て好める菓子にうまき茶を呑みぬ